

---

バッハ《マタイ受難曲》演奏分析 ——1970–2000年の古楽の録音を比較して——

杉山 恵梨 (大阪大学)

---

本発表は、バッハの《マタイ受難曲》BWV 244 を事例に、2000年までの三十年間における録音の比較を通して、古楽実践の歴史の変遷を考察するものである。分析の対象には、ドイツ語圏（オーストリア、ドイツ、スイス）、イギリス、オランダ、日本の古楽の演奏グループによる録音を中心に据える。

20世紀後半、古楽の演奏グループが複数現れた。そうした展開に至る発端は、A. ドルメッチや W. ランドフスカなどの演奏家による18世紀以前の室内楽・声楽曲の復興的实践、すなわち20世紀初頭の「歴史的な演奏運動」にある。その潮流は、第二次世界大戦後、N. アーノクールや G. レオンハルトを代表とするような演奏家に受け継がれて、バッハ演奏を中心に古楽実践は本格化した。アーノクールによる《マタイ受難曲》録音は、ライブ録音を含めて三種類（1971、1985、2000）ある。先の研究では、アーノクールの1971年盤に対して、1950年代の K. リヒターなどによるロマン主義的な演奏との比較を通して、音の長さの変化が主な論点として指摘されてきた。例えば、D. ファビアンはリズムに着眼点をおいた分析（2003）を行っている。だが、古楽実践が進展した1970年代以降の精査を含む、包括的なバッハ演奏史研究には至っていない。

本研究の目的は、1970年以降の《マタイ受難曲》録音に、古楽の演奏理念がどのような影響を与えてきたのかを明らかにすることである。具体的な方法は、各演奏家が採用した楽器（オリジナル楽器またはピリオド楽器なのか）、演奏法、独唱者の声域、古典調律の情報を整理した上で、各曲にどのような速さの設定や表現（装飾、アーティキュレーションなど）がみられるかを分析し、比較するというものである。

J.E. ガーディナーや F. ブリュッヘンなどによる1980–90年代の《マタイ受難曲》録音に、「歴史的な情報に基づく演奏 Historically-Informed Performance（以下、HIP）」の傾向が強くみられるようになる。彼らにも自らを HIP のプロパガンダとして売り出す側面はあったが、そうした作用もあって古楽の市場性は高まったと考えられる。1980年代半ば以降、音楽市場への古楽の進出傾向は顕著になった。1950年代に古楽実践の牽引者が着手したバッハ演奏の研究は徐々に広がって、《マタイ受難曲》においては特に、速さ、アーティキュレーション、楽器や声の組合せによるテクスチャー、といった音楽形成面に影響を与えてきたと考えられるのである。ただし、形式的な実行に留まっている古楽実践もあった。作品の「歴史的な情報」の一部であるテンポ表示に対する固執が見受けられるガーディナーの演奏（1988）は、その例である。こうした古楽実践

には、HIP の演奏美学が極端に関与していたと考えられる。